

『もっと老上、ずっと老上～学ぶ楽しさ 人のあたたかさ 明日への希望 をみつける学校～』

2020年度 老上小学校だより No.11(8月5日号)

老 おいかみやま通信

①おきなめあてにむかって ②いどみ つづける子 ③か ながえ 深める子 ④み とめ つなげる子 (校長 山崎 賢)

(学校だより、学年通信・ほけんだより、行事予定、下校時刻などは老上小学校HPでもご覧になれます)

(レジリアンスを育むために)

困難を乗り越えた経験を言葉にすることが自信につながる



6月からの本格的な学校再開から2か月余り、子どもたちは7月27日以降も暑い中での学習をがんばってきました。そして明日から、8月18日までは、夏季休業日となります。誰もがこれまで経験したことのない中で、日々できることにひたむきに取り組んできた子どもたちをぜひ、認め、励ましてあげてください。

1学期の間、様々な制約がある中での学校再開となり、マスクの着用やこまめな手洗い、人との距離をとるなど、子どもたちにとっては、かなりのストレスもあったかもしれません。でも、その中で過ごした数々の体験は、終わってみれば困難を乗り越えてきたという自信となることだと思います。そしてその自信を確かなものにするためには「よくやってきたね」という重要な他者からの承認と励ましが大切です。

だれもが日々の暮らしに精いっぱいなので、私たちの日常は、あえて言語化しなければ自分では特に気にしないことが多いものです。でも、言葉にして伝えることで記憶に残していくことができます。そして、その記憶が自信につながり、同じような困難な場面に出合った時に、それを乗り越える力につながるのだと思います。できるようになったことや、成果が出たことだけでなく、たとえそれが社会的にマイナスであるかのように多くの人にとらえるかもしれないエピソードであっても、過ごしてきた時間そのものを意識的にポジティブに言語化することで、復元力が育まれると思います。

もちろん、そのためには安心できる関係と環境が必要です。ギスギスした関係の中で、いくら言語化したところで、マイナスの記憶しか残らないでしょう。不平不満や、特定の人や出来事などへの否定的な言葉が渦巻く中では、子どもの「信じる心」が不安定になってしまいます。また、以前にもおいかみやま通信(2018.11.2号)でお伝えしたように「ダブルバインド」(*)の中では、いくら言語化したところで、「どうせ本当はもっと頑張りなさいって思ってるんでしょう」という子どもの受け止めになってしまうこともあるので、注意が必要です。

そしてもう一つ大事なことは、子どもが元気で過ごせたこと、自分なりの学びや経験ができたことに対する「ありがとう」の感謝とねぎらいの言葉でしょうか。様々な場面で、その時は意欲が湧かなかつたり落ち込んだりしたかもしれませんが、そういう環境や空間を共にできた周りの人の存在があったことにも目を向けていくことで、自分の存在価値に気づくことができます。もちろん、そうやって言語化して子どもを元気づけ、認めている自分自身(主に保護者でしょうか)にも、「よくやって



いる」「子どもの成長に関わらせてもらえてありがとう」と言語化して意識づけしてほしいと思います。

社会的に否定的に捉えられがちな事柄であっても、考えようによっては前向きにとらえられることを、言語として記憶していくことは、困難な状態からも立ち直れるという希望をもたらします。繰り返しになりますが、「できた」、「伸びた」だけでなく、うまくいかないことがあってもその中を過ごしてきたこと、自分とは違う人の中で生活してきたことで世界が広がったことなどに目を向けながら、褒めるだけではなく、承認と感謝の言葉で1学期を締めくくれたらと思います。



※「ダブルバインド」

1956年に米国の文化人類学者・精神医学研究者のグレゴリー・ベイトソン氏によって生み出された造語。同時に送られるふたつの矛盾したメッセージの間で板挟みになってしまった相手が、最終的には従わざるを得なくなることで、ストレスを溜め込むコミュニケーションパターンを指す。

(こどもまなびラボ (<https://kodomo-manabi-labo.net/double-bind>) より)

2学期以降の学校行事等の見通しについて

今日で1学期は終了するのですが、先日お知らせしたとおり、今年度の成績評価は、10月と3月の2回とします。また、2学期以降の校外学習、修学旅行、フローティングスクール（今年は1日日程）などについては、今のところ感染予防対策を講じたうえで予定通り実施の計画をしていますが、最近の感染拡大の報道も踏まえ、今後の状況によっては、変更・中止等もありますので、ご了承ください。

なお、参観については、密集の状態が予想されるため、今のところ2学期以降も見合わせていきます。地域のふれあい老上まつりも中止が決定されたことを受け、例年実施していました学習発表会（土曜開催）も中止しますが、子どもの頑張り等は今後何らかの形でお伝えしていきたいと考えています。

◇◇シリーズ人権①◇◇（このコーナーでは「人権」について様々な例から考えていきます）

地球には表も裏もないはずなのに

様々な報道の中で「地球の裏側」という表現によく出会います。これほど自分中心のものの見方はないと思うのですが、リオ五輪の時にはNHKなどでも頻繁に使われていました。そもそも地球は球体なので、表や裏という概念自体が疑われます。私たちが普段目にする地図はどうでしょうか。日本を中心にした世界地図しかみていないと、南半球の国で使われているような地図に違和感を持つこともあります。ただ、地図なら裏と表はありますが、地球には裏表などないはずなのに、なぜ何の違和感も持たず「地球の裏側」などという表現が多く使われているのでしょうか。些細なことかもしれませんが、自分の思考がどこを中心に、まただれを中心にしたものの見方なのかを考えるきっかけにでもなればと思います。ある歌の歌詞の中の「だれも端っこで泣かないように、君は地球を丸くしたんだろう」の歌詞（※）が、地球の表裏を論じているうちはむなく響くだけです。

※「有心論」RADWINPS 2006 より

